四谷

〔江戸砂子四上〕四谷（内藤宿　佐目河橋　大木戸　新宿　千日谷　千駄谷　中野　高井土）

四谷と云は、千日谷、茗荷谷、千駄谷、大上谷の四谷也、

前板右のごとし、さかれども千日谷は、御入國よりはるか後に呼だる名也、尤名にかゝはらずといはゞ、猶此餘も谷は多し、四谷は古き名なるよし、永祿天正までは、此邊すべて霞村といひけるよし、古記に見ゆと也、又一說、往古むさし野に續て原野也、いづれのあたりにや、家四ッありし故四家といひたりとか、此類多ければ、實とすべくや、

〔南向茶話〕問曰、四谷之儀、田舍にて民家の家數により、三軒家、四軒家など申候へば、其例に、以前民家少き時の號なるべしと被存候、左候はゞ、谷之字誤りにて候半か、如何、

答曰、仰の通り、我等にも左樣に相心得居候處、彼地に久々居住せし老人物語致され候は、古來此地、今の糀町六七町之內之所谷あり、又今の鹽町の所も谷にて坂有り、其前に民家一軒有之て、夫婦居住せし故に、俗に夫婦と呼し也、寛永十三年外廓出來之刻、御堀揚土を以、東西兩谷埋め候ゆへに、平地となり、谷なしと云とも、舊名殘り、鹽町の入口を坂口と小名に呼び候は此所也と云、此地東西南北ともに谷有ゆへに、四ッ谷と號する由、

〔新編江戸志八〕四谷

四ヶ所の谷あるゆへに四谷といふ、千日谷（四谷のうち）、茗荷谷（大久保なり）、千駄谷（青山に近し）、大上谷（高井戸邊、四谷より凡一里半餘も隔たり）、四谷名主勘四郎に尋るに云、往古はたゞ、武藏野に續たる曠野にて、させる家居もなし、はづかに家四つあり、梅屋、木屋（今久保屋といふ）、茶屋、布屋の四軒有り、甲州往來の旅人のやすみ所なり、然るに御當地日々御繁昌に付、江戸傳馬町鹽町の代地、或は糀町邊の寺社の代地替地被仰付、錐を立るの地もなき樣になりぬる故に、四っ家名さへ今はうせて、四谷と書かへぬ、されども右四家のうち梅屋保久屋は、子孫今に此地にあり、その地の高札にも、いまだのこりて有り、